# 第 2 章「熟議 2013 in 兵庫大学」実施計画について

## ～テーマの設定と内容～

### 1. 熟議の継続とテーマ

2012 年 7 月 1 日に実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」は生涯学習をテーマとして実施された。このとき熟議手法を確立し、さらなる普及を推進する必要性が指摘された。また地域において、高校生を含めた多様な世代が一つのテーブルで話し合う意義も認められた。こうした経緯から、本学では 2013 年度においても熟議を継続すること、そして熟議のテーマとしては、「地域」を中心とすることが確認された。これを踏まえ、「熟議 2013 in 兵庫大学」が始動することになったのである。

「熟議 2013 in 兵庫大学」においては、下記の通りのプロジェクトメンバーにより、企画・運営が行われた。

田端 和彦　社会福祉学科 教授
吉原 惠子　社会福祉学科 教授
北島 律之　社会福祉学科 教授
森下 博　　経済情報学科 准教授
木下 幸文　健康システム学科 准教授
久井 志保　看護学科 講師
井上 朋子　短期大学部保育科 講師
小林 洋司　短期大学部保育科 講師
副島 義憲　学長室長
柏村 裕美　学長室員

「熟議 2013 in 兵庫大学」の熟議プロジェクトチームでは、昨年度同様熟議のテーマの選定、実施に係る具体的な課題の導出などを行う。下記のように 8 回のミーティングを重ねた。

熟議のテーマであるが、兵庫大学は地域の生涯学習の拠点となるという使命を掲げており、昨年度の「熟議 2012 in 兵庫大学」では、生涯学習を取り上げた。さらにそれを発展させること、あるいは異なるテーマを考えることが課題となった。特に若年者の場合、関わることの少ない「生涯学習」には十分な関心を持つことができない、との点が指摘され、多くの方が参加しやすい、そして考えるきっかけとなる「地域」をテーマとして掲げることとした。特に、自治体の総合計画等で繰り返し表出される、「地

域活性化」に本学もまた寄与することの重要性から、「地域活性化のための熟議」と位置付けることになった。これは熟議が、地域政策にも直接寄与し得る機会となることを示す機会ともなる。

その上で、単年度ではなく、複数年度として 3 年間で、政策提言など結論を導き出す方法が提案され、3 年計画の熟議がスタートすることとなった。地域において具体的に考え、話し合うべき課題を探るため、地域（加古川市、高砂市、稲美町、播磨町の二市二町）の総合計画等を参考に検討をしたが、課題を解決する以前に、住民が課題をどのように認識をしているのか、という市民の自立を促すことの重要性もあり、まずはニーズを引き出し、その上で課題を選定することが望ましいと考えられた。まずは話し合うこと、そしてそれが過去を払しょくするのではなく、若者たちが参加しやすい未来を向いての話し合いの場にしたい、との結果、「熟議 2013 in 兵庫大学」のテーマを「加古川（地域）の未来について話をしよう！～世代を超えた熟議～」と定めたのである。

| 会議名 | 日程 | 内容 |
|---|---|---|
| プロジェクトミーティング① | 平成 25 年<br>5 月 1 日（水） | ・熟議の目的を「地域活性化のための熟議」と位置付ける<br>・3 年計画での推進を考える。 |
| プロジェクトミーティング② | 6 月 17 日(月) | ・3 年計画の 1 年目はニーズの把握機会とする。<br>・具体課題の設定は、地域を学ぶ機会を若年者に提供すること、また地域への還元を重視する。<br>・2 市 2 町が掲げる課題に沿ったテーマ。 |
| プロジェクトミーティング③ | 7 月 29 日（月） | ・兵庫大学の推進する COC（Center of Community）との関係について。 |
| プロジェクトミーティング④ | 9 月 2 日（月） | ・テーマの決定。「加古川（地域）の未来について話をしよう！～世代を超えた熟議～」<br>・参加者の構成見込みの策定。 |
| プロジェクトミーティング⑤ | 10 月 7 日(月) | ・参加者事前配付資料についての検討。<br>①基礎統計的な資料の配付<br>②「強み」「弱み」が見えてくる質問方法を取り入れた記述<br>③高校生・大学生に対応し得る「自己認識シート」<br>④熟議手法を問うアンケート |
| プロジェクトミーティング⑥ | 11 月 19 日(火) | ・当日の進行についての確認。<br>・ファシリテーター養成講座について。 |
| プロジェクトミーティング⑦ | 12 月 10 日(火) | ・「熟議 2013 in 兵庫大学」振返り。<br>・報告書内容、各担当者の検討。報告書は 3 年計画の中間報告的意味を持つため、次年度への課題を意識した内容とする。 |
| プロジェクトミーティング⑧ | 平成 26 年<br>2 月 17 日(月) | ・報告書の追加項目の確認。<br>・来年度の実施について。 |

## 2.　3 年計画となる熟議

「地域活性化のための熟議」を基軸に 3 年計画で進めるにあたり、地域の定義、活性化の意義などを明らかにする必要がある。まず地域については、兵庫大学の存する加古川市を中心に、東播磨沿岸地域とし、具体的には上述の二市二町として、それを加古川地域と称する。次に、活性化の意義であるが、

通常、活性化は経済の活性化として捉えられるが、ここでは昨年度の熟議での成果も踏まえ、若年者の社会参画や地域での学ぶ機会の提供など、地域の資源や人材の活用なども含めることとする。このことは、本学の専門職の人材養成とも密接に関連することでもある。

その上で、前述のように、最終的には地域への政策の提言を行うなど、地域に対して熟議の成果を政策に反映することができるような3年間の、計画が必要になる。そこでは、第一に課題の導出、次いで課題に対する解決策を探り、そして提言としてまとめる、というプロセスを要する。政策への反映を視野に入れてのテーマの選定が重要となる。

そのため、1 年目は、ニーズを把握する機会として、参加者の年齢や所属が混在するグループ分けを行い、比較的規模の大きい熟議を開催する。2 年目はニーズを踏まえ、テーマを絞り、より小さなグループで、場合によっては高校生のみ、高齢者のみという年齢によるグループ分けを行っての、詳細な議論の場を設定する。そして3年目は、同様にテーマを絞り議論を深め、地域づくりの専門家なども参加する場を設けて、具体的な提言を取りまとめる。それらについて加古川市をはじめとする自治体に提案をする。そのためには自治体へのチャンネルを創ることも必要になる。

さて、こうした政策提言のための3年間を要すると同時に、この3年間では、熟議による合意形成の手法を地域に根付かせることも必要となる。これらは地域における自主的なガバナンスの確立とも関連する。

政権に返り咲いた自由民主党は、その綱領に、「自助自立する個人を尊重し、その条件を整えるとともに、共助・公助する仕組みを充実する」ことを謳う。重要な点は、自助を中心としつつ、共助と公助を並列に扱っている点である。つまり、新自由主義的な社会保障の考え方において、自らを助け、できなければ共助、それでもできないと公助という順をも突き崩す考え方である。ここには共助と公助の区分のむつかしさがある。地域において、様々な活動がなされる。その多くは自治体が補助を行ったり、協働をするなど、自治体も関わる事業であり、実質の公助がなされている。しかしながら、地域における活動では、財政難もあり自治体の役割が縮小される一方で、理念に基づく NPO と地縁組織との協働が模索されるなど、共助が重視される中で公助との境界が明確ではなくなりつつある。公助の場合、首長の選挙に基づく行政の、また議員の選挙に基づく財政のガバナンスが作用するが、共助においては明確なガバナンスが存しない。

ガバナンスの一つに意思決定がある。地域における熟議は、すなわち個々の政策とそれを実施する裏づけたる予算を定める合意形成の手法となりうる。例えば、イギリスではコミュニティの自治組織として、パリッシュがあるが、住民総会や無給の代議員によるパリッシュミーティングなど意思決定の仕組みがある。日本では、地方自治法の定めにより、主に合併などでの弊害を避けるために地域自治区の設定が認められ、そこでは地域協議会が意思決定に関わるとされる[1]。しかし地域自治区の数は限定的であり、さらに自治会など、より小規模なコミュニティレベルでの自治組織を踏まえるとそれらの意思決定

[1] 総務省「地域自治区制度について」

の仕組みは多様であり、熟議を民主的な合意形成の仕組みとして位置づけることができるのではないか。

ところで、ローカルガバナンスを巡る議論とは別に、合意形成の手法は、特に高校生を考えた場合、生徒会役員選挙など民主主義の基本たる選挙や多数決の原理について、実地で学ぶ機会はあるが、クラスルームなどでの協議はあっても、時間をかけた話し合いによっての合意形成を学校教育の現場だけでは学ぶことも、またそのために必要な数々の能力を育むこともむずかしい。高校生だけでの熟議を行う背景には、熟議手法の高校生への定着を目指す活動の一環ともなる。また最終年度には、地域の高等学校側に対し、教育効果を踏まえてのカリキュラムや学びのプロセスについての提案などを行う。これもまた熟議の「目に見える」成果になると考えられる。

## 3. 「熟議 2013 in 兵庫大学」計画の詳細

「熟議 2013 in 兵庫大学」は熟慮と議論による熟議という手法を市民と一緒に共有し、地域の課題である「地域活性化」をテーマとして議論を行うことで、将来の地域の方向性を定め種々の課題の解決に資する最初のステップとすることを目的とした。すなわち地域における住民のニーズの導出である。

また学術的にも、昨年度同様に、討議型世論調査の手法を一部応用し、議論の前後でどのように意見が変わったのかを検証したい。討議型世論調査では参加者に議論の前に十分な情報を与えるが、昨年度実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」ではこの点を踏まえ、5 段階での構成を基本とする、独自の熟議手法を開発した。「熟議 2013 in 兵庫大学」でもこの手法をそのまま応用することとした。【p98 参照】

各段階の詳細を示す。

まず事前に学習して認識を持つことが、「熟慮の段階」である。ここでは、対象とする地域の定義、その主要統計など最小限の基礎的な資料を送付し、参加者がそれを読むことから始まる。プロジェクトチームでは、当初、当日には参加者により地域に係る議論がスムーズに行われるよう、この事前の「熟慮の段階」では地域のことをじっくり考え、自身の価値観から地域を見定めることが必要であると考えた。

そこで、まず、参加者は地域と関わる場合の自分の価値観を見出すために、資料 A として下記を問うた。

①あなたは 20 年後どんな生活を送っていたいですか？

②あなたは普段どういった時に「幸せ」を感じますか？

③あなたがお住まいの「ふるさと」自慢をしてください。

④あなたは将来どんな「ふるさと」にしたいですか。

参加者は未来の理想から自分を眺める事で、考え方を客観視する手法で、まず 20 年後の自分自身に係る理想を思い、そのようになるための基礎となる今の幸福感を考える。同様に、今度は地域の「今」を考え、その上で未来の理想を描く。未来像には、自分自身の幸福感や未来への理想が反映される。

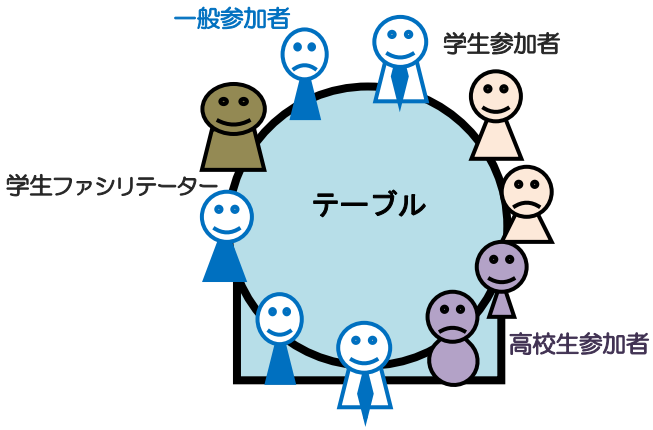
そして、資料 B として下記を問うた。

●あなたが思う加古川地域の「強み」を記述して下さい。

●あなたが思う加古川地域の「弱み」を記述して下さい。

参加者は自分の地域観を客観視した上で、加古川地域の「強み」と「弱み」を冷静に判断することができるであろう。この資料 A、資料 B の回答についての分析は第 3 章に示す。

次が「議論の段階」であり、ここでは名前以外は明らかにせず、つまり立場が平等として、会場にて、熟慮の結果として持つ認識を出し合い、議論をする。１つのテーブルには、8 人程の参加者がつき、ここに学生のファシリテーターと職員による記録係が配置される。テーブルは指定されており、議論の進行は、ファシリテーターが行う。




「共有の段階」は、議論で得られた結論や議論の内容を共有するもので、これは議論の後、結論を参加者が報告することで行われる。複数あるテーブルで、どのような議論が交わされたのか、あるいは結論は何かを参加者が共有する。討議型世論調査の場合のように、無作為抽出で参加者を選んだのではなく、テーマに惹かれ希望する人が参加をしており、参加者には、地方公務員など直接地域とも関わる業務に就く人や間接的にそれを支える人もおり、共有された熟議の内容を持ち帰り、今後の地域活動に活かすことができる。

「振り返りの段階」は、議論により参加者一人一人の心の中で、生涯学習への認識はどのように変化したのかを確認するとともに、仲間づくりと自分の成長を確認する。

最後は、「活動の段階」。今回開催された「熟議 2013 in 兵庫大学」で出会った仲間とともに、その成果を踏まえ今後の地域での活動を行う。それぞれの立場で、それぞれの考え方を持ち、共に活動していくことが、熟議の最大の目標でもあり、また成果である。

（田端和彦）